

# 生活史調査の意味論

有 末 賢

- 1 はじめに
- 2 社会調査方法論と意味論
- 3 質的調査法とインタビュー
- 4 調査者―被調査者の関係性と意味の生成
- 5 モノグラフ法と記述から作品化へ
- 6 調査のバイアスとジレンマ
- 7 おわりに

## 1 はじめに

ライフヒストリー研究には、事実の側面と意味の側面が重なり合って存在しているように思われる。歴史的事実の記述を中心とした政治史、外交史、経済史、社会史などに比べると、生活史には人間主体の「生きる意味の探求」という意味の側面が重要視されている。しかし、人間の内面や「生きる意味」自体に主題を置いた小説、文学や哲学に比較すると、生活史は、個々人の「生きた経験」に根差しているという意味で、決してフィクション

ンではなく「事実」を根拠にしている。したがって、これから問題にする生活史調査 (life-history research) の場面においても、「事実の探求」と「意味の探求」が重なり合いながら進行していく、と考えられる<sup>(1)</sup>。

生活史調査を考えていく場合に、調査方法論と相互作用論もしくは意味論は密接に結び付いている。ライフヒストリーの調査が、インタビューという形式をとろうと日記・自伝などを読み、解釈するという方法であろうと、生活史調査の主要な部分は、質的なデータの生成、質的な調査行為、質的なデータ解釈にかかわっている。インタビューや自由面接調査などの調査者が直接、被調査者と「会話」をしながら、生活史調査を進めていく場合には、調査者と被調査者との対面的な相互作用が行われるわけだし、日記や手紙、自伝や伝記などの「書かれたデータ」をもとにして、生活史を調査していく場合にも、対象者との対面的な相互作用ではないが、言語・文字というメディアを介しての相互作用が行われている。「読む」という解釈行為も、それ自体が相互作用であり、意味の領域と分かち難く結び付いているのである。

したがって、認識論的、理論的立場としての、現象学的社会学やシンボリック相互作用論、エスノメソドロジーなどの「構成主義」「構築主義」とは、共通の基盤を共有していると言うこともできよう。何故ならば、実証的な社会学がフィールドとしている都市、農村、地域社会、政治、経済、文化、産業、環境、教育などの「実態」を伴った「現場」(フィールド)においては、客観的な「数字」で示されるようなデータも数多いが、生活史調査が主要な「現場」と考えている「個人」の場合には、量的に把握できる「数字」よりも、圧倒的に「個人」の言語や会話を媒介とした「意味解釈」をともなったデータで埋めつくされている、と考えられるからである。「フィールドとしての個人」<sup>(2)</sup>を考えると、個人の生きてきた「歴史」(生活史)や個人の「生活」にかかわる事柄、仕事や家族、友人などの「人間関係」、趣味や価値観などの「意識」「感情」などが、対象領域として浮かび上がってくる。これらのフィールドにおける「調査項目」は、いずれも個人の「言葉」や「行動」などの質的で、観

察可能なデータを媒介として調査されることになる。つまり、言語や行動を媒介としたデータ構築、データ構成が必要不可欠なものである。

この意味で、生活史調査における構築主義の前提が確認されるわけである。しかし、だからといってエスノメソドロジの会話分析や、メディア研究や社会問題研究などにおいて最近頻繁に引用されている「言説分析」などの方法と、ライフヒストリー調査の構築主義、構成主義とは必ずしも一致はしていない。エスノメソドロジや「言説分析」に見られる特徴は、会話のデータなり、言説なりを一定の「文脈」を考慮に入れるとしても、基本的には「抽出」して、「収集」する事から始めている。そういう意味では、調査方法論の上では、データの量的「抽出」と「収集」の技法を類比的に応用していると言える。統計的調査法において、母集団から標本 (sample) を抽出する際に、基本的に無作為抽出法が採用され、そして質問紙配票―回収によってデータの「収集」が行われるのと、同様の流れに沿って、会話や言説の「抽出」と「収集」が行われている。しかし、ライフヒストリー調査においては、調査項目が「個人」の人生上の「文脈」に配置されてこないと、データの「抽出」も「収集」も意味をなさないのである。したがって、調査の意図や目的に沿った調査項目の配置に従った「回答」の収集では、データの性質そのものからして不十分なのである。

本稿においては生活史調査全体を意味論の観点から解釈し直してみたいと考えている。まず、さしあたって「調査方法論」と「意味論」の関係性や考察の射程について考えて行くことから始めよう。

## 2 社会調査方法論と意味論

石川淳志・佐藤健二・山田一成編『見えないものを見る力【社会調査という認識】』（一九九八年）には、社会

調査という「認識」がどのような「意味論」の上に成り立っているのかという視点が、全編に徹底した形で提起されている。特に佐藤健二が執筆した第Ⅲ部「方法」から見た調査においては、「問うということ―問題の組織化」から始まって、「対象を設定する―単位と全体の構成」「データの収集―新しいテキストづくり」「データの処理―データ・ベースの構築」「データの分析―比較から説明へ」と続いて、最後に「書くということ―分析の組織化」で締めくくられている。ここで、佐藤が展開した社会調査方法の認識のすべてについて見ていくことはできないが、例えば「データの処理」の中で、佐藤は「分類のダイナミックス」という項で次のように記している。

「分類とは、いわば対象を別な角度から整理し、一覧することのできる視座を構築することである。分類を一回かぎりのコード付けというか、整理箱にデータを分けることであると考えてしまうと、もうひとつの重要な側面が見落とされる。分類には「分ける」だけでない、「関係づける」という側面があつて、一見異なったものをつなげるという作用こそが、もうひとつの重要な有効性だからだ。何度かまた幾重にも分類が立ち上がりうるということ、分けるだけでなく関連づけるという作用を有することとの二つは、大変重要である。その意味において分類は、一方における網羅や枚挙という、全体を想像するために役立つ、認識論的な作業をも用意するのである。<sup>3)</sup>」

このように、「問うこと」「読むこと」「見ること」「分けること」「数えること」「書くこと」など、社会調査の中の「行為」を意味論の観点から吟味するという調査の方法意識が展開されている。

ここで、社会調査のみならず社会的行為におけるデータと理論との関係性を整理してみると表1のようになる。これは、社会調査の行為を大きく、第一段階としての「問うこと」「読むこと」の段階と第二段階としての「見ること」「聞くこと」「話すこと」などに分けてみる。この第二の段階の中には、社会調査としての「分けること」「数えること」なども含まれている。しかし、現場(フィールド)における調査行為としては、「見ること」

表 1 社会調査の行為と理論との関係性

| 行 為                  | データとの関連 | 理論との関連                    |
|----------------------|---------|---------------------------|
| 「問う」<br>「読む」         | テキスト    | 構造主義<br>(ポスト構造主義)         |
| 「見る」<br>「聞く」<br>「話す」 | 意 味     | 相互作用主義                    |
| 「書く」                 | 記 述     | 構築主義 (構成主義)<br>[自己反省、再帰性] |

「聞くこと」「話すこと」は大きな要素である。そして、最終的に調査行為を完結させるのはやはり「書くこと」である。量的な調査においては、「数えたり」「分類したり」「分析したり」も結局「書く」ことに結びついていたと思われる。しかし、データの生成場面において「分けること」「数えること」も重要な調査行為であり、私はその意味で、第二段階は現場でのほとんどすべての行為を含むものと考えている。そして、現場から帰ってきて、最終的に「作品」に作り上げる段階が第三段階の「書く」行為である。このようにしてみると、データとの関連で言えば、「問うこと」とはテキストを確定する行為であり、「読むこと」は文字通りテキストを読む行為である。社会理論から見ればこれは構造主義ないしはポスト構造主義の理論がかかわっている。しかし、現場や実態の調査(フィールド・ワーク)を志すならばテキストの解釈だけに終わることはない。したがって、「見る」「聞く」「話す」行為は、データとの関係では「意味」の生成であり、社会理論的には「相互作用主義」の立場に立つことになる。そして、「書く」行為は、データの記述であり、社会理論から見ると構築主義ないしは構成主義を背後に背負っていると考えられる。何故ならば、データの記述は「現実」を再構成し、リアリティを構築し、そして書き手に対しても読み手に対しても、自己反省を促し、再帰的な行為として、第一段階の「問うこと」「読むこと」に確実につながっていくからなのである。<sup>(4)</sup>

社会調査と社会的行為との関連、調査とデータそのものとの関連、そして調査と理論との関連は、このように循環した関係の中にあるように思われる。しかも、従来考えられてきたように、実証的な社会調査や標準化された「質問紙」配票調査が、社会理論としては機能主義や構造・機能主義に依拠しており、参与観察や生活史法を用いたフィールド・ワークや質的調査は、理論的にはシンボリック相互作用論や現象学的社会学を応用したものである、と単純に当てはめることはできないのである。単一の調査過程と思われてきた「調査行為」には、実は複雑な「調査行為」が多数絡んでおり、データとの関係性や社会理論との関係性もそのつど複雑に関係しているのである。

また、データにおけるテキスト、意味、記述のそれぞれの次元も現実には重層的に錯綜していると言える。例えば、生活史のデータを自伝なり日記なり、ある種の固定したテキストとして解釈するという「読む」行為が社会調査として行われることもある。あるいは、インタビューをした話者のライフストーリー（ライフストーリー）をある時点で、「テキスト」として設定する場合もある。さらに、論文なり著作なりで「記述」していくことは、対象者の生活史を研究者がある種の「テキスト」に作り替えていくことを意味している。また、逆に「読者」の側から見直すと、作品は「読まれる」ことから出発し、話者との相互作用を記述を通して意味を共有することから、テキストが意味を発生するとも言えるのである。このように、三者はどこから出発してもどこかに帰着するという「循環」の中で、調査と理論を往復しているのである。

### 3 質的調査法とインタビュー

社会調査の方法と意味論との関連の次に、質的調査法としての生活史調査におけるインタビューの意味論を考

えてみたい。まず第一に、インタヴューの原型としての「対話」の意味について、考察する必要がある。われわれは、日常的な言語生活において数え切れないほどの「会話」の中で生活している。家族との「挨拶」に始まる会話、仕事上の「用件のみ」の会話、電話、伝言、メッセージ、報告、会議での発言などなど、そして同僚、友人、家族などとの感情を伴った会話、怒り、愚痴、反省などなど、われわれの日常生活は確かに「会話」に溢れていると言える。この場合の「会話」とは、一応コミュニケーションとしての「発話行為」と相手のメッセージを聞き取る「聴取行為」が概して往復される、相互行為を意味している。しかし、多くの日常的な言語生活において経験している「会話」は、(1)「挨拶」などの慣習的行為か、(2)自分自身の言いたい事に重点が置かれる発話行為のみの意志伝達行為か、あるいは(3)通常二〜三回から多くて四〜五回の往復で済んでしまう簡単な会話行為に分類される部分がほとんどである。さらに、相手の発言や感情の表現などを聞く「聴取」行為を含む(3)の簡単な会話行為の場合でも、日常生活においては一对一の「対話」よりも、三人以上の「会話」場面や会議、あるいは状況がオープンになっている「喫茶」「飲食」場面などが多いとも言える。

それに対して、最低でも一時間、通常は二〜三時間はかかるインタヴューという「対話」状況は、それだけでも日常的な言語生活にはめったにない状況である。しかも、相手がじっくり聞く姿勢をもっており、発話行為はさまざまな条件によってより促進される傾向が強い。もちろん、対話の基礎になるお互いの存在の認識や関係性も重要な要因として働いている。インタヴューアーとインタヴューーとの関係性については、調査者―被調査者関係において詳しく検討していく予定であるが、「対話」の基礎になる関係性は、単にじっくり「聴く」という態度だけにあるのではない。「対話」である限りにおいては、相手の「話」に対して、こちらも「話」を展開していかなければならない。ストーリーは、相手に対して理解され、受け入れられることを前提としている。しかしある場面では、相手に対する不同意や疑問、積極的な否定さえも必要になってくる。と言うのは、「対話」の継

続には基本的には、自己肯定や受容感が必要であるが、しかしそればかりが続いては、かえって相手は発話の意志継続を弱化させてしまうこともあるからである。もちろん、そうした相手に対する否定も「対話」が継続される潜在性を前提としており、「対話」が断絶してしまう程度の拒否ではない。

このような「対話」の意味の前提の上に、生活史調査というインタヴューの意味論を重ねて考察していきたい。ライフヒストリーをインタヴューによって「聴取」する場合に、対象者が自らのライフヒストリーを語り始めるところから、「対話」が始まっていると考えるのは、ほとんどの場合「誤り」である。と言うのは、前述したようにライフヒストリーを語るという発話行為は、日常生活における会話や対話のレベルにおいては、ほとんど例外的なことであり、人は多くは、日常的にはライフヒストリーを語るというコンテクストを持っていないのである。その意味で、生活史調査のインタヴューにおいてライフヒストリーを語り出す前に、必ず何らかの「対話」を通して、ライフヒストリーが「準備」されていると言うことができる。これは、インタヴュアー（調査者）とインタヴューイ（被調査者）双方の「準備」とも言える。例えば、調査者の側では、対象者（相手）のライフヒストリーの何に興味を抱いているのか、対象者は「今、現在」の相手ただ一人なのか、それとも複数いる対象者たちの一人なのか、あるいは、相手と自分との年齢差、性差、人種・民族、言語、宗教、職業、階層などあらゆる経済的・社会的・文化的背景がかかわりながらインタヴューという接点を共有しているわけである。調査者が相手に対して、ライフヒストリーを聞きたいという了解をどのように確保したのか、またどの程度の資源（時間的なしは金銭的）を提供もしくは割愛することに同意したのかなどインタヴューという「対話」に入る前の段階の交渉も「対話の準備」の中には含まれている。そして、調査者が相手に対してどのような「問いかけ」を発することからインタヴューが始まるのか、と言う点までが調査者の側の準備に入るのである。そして、今度は逆に、インタヴューイ（被調査者）の側でも、さまざまな条件が働いている。例えば、一番大きな条件は、被調査

者の側でのライフヒストリーを「語りたい」という動機づけの部分である。これが、他の多くの標準化された「質問紙配票調査」と大きく異なる点であるが、被調査者は、自分自身の知識、行動、経験、意識、価値観などのごく一部だけを聞かれるのではなく、自分自身の生活史（ライフヒストリー）を「語ろう」という意志が程度の差はあれ持つていて初めて、生活史調査は成り立ちうる。したがって、「対話」が成立する根拠は、被調査者の側での「語ろう」という意志であり、調査者側が「聴いてくれる」という前提である<sup>(5)</sup>。

しかし、逆に言うところにも生活史調査における「落とし穴」が存在している。つまり、ライフヒストリーの「語り」が、対象者の「語りたい」という意志と調査者の「聴き取りたい」という意志とが、丁度ジグソー・パズルのようにピッタリはまってくるために、かえってライフヒストリーが安易に合成される可能性が潜んでいるとも言えるのである。歴史家によって「死者」の「生きた軌跡」を後付けして行う行為は、対象者がもはや「語ることはない」存在であるだけに、残された資料、書き残した文書などを批判的に吟味しながら考察していく。また、ジャーナリストやノンフィクション作家が現存している「有名人」のライフヒストリーを伝記や評伝の形で書き上げる際にも、「口述」や「聞き書き」を資料の一部として使用することはあるが、しかし本人が隠していたり、言わなかった事実を言わば「暴く」ことに、重きを置いた作品は多い。社会学や文化人類学などの生活史調査においては、基本的には本人の「語り」に第一義的な信頼を置いている。この点は、生活史調査の意味論において、史学の方法論とも、ジャーナリズムの方法論とも異なった特徴であるわけだが、その前提となっている「対話」の成立根拠について決して無自覚であってはいけな<sup>(6)</sup>いと思われるのである。

#### 4 調査者―被調査者の関係性と意味の生成

生活史調査がインタヴューを通してなされる場合、インタヴューアー（調査者）とインタヴューイー（被調査者）の関係性は、ライフヒストリーの「生成」にとつて最も重大な鍵となるものである。従来、この種のライフヒストリー調査においては、「口述」の生活史や「聞き書き」「伝承」などさまざまな名称が冠されてきたが、私は「インタヴュー」というややジャーナリズムの世界で多用されている用語をここでは使用したいと思う。言うのは、「口述」にしろナラティヴにしろ、対象者（話者）の側の「語り」だけを中心にしており、「聞き書き」という方法にしても、「耳で聴いたことをそのまま書き写す」というニュアンスが強いような気がする。「伝承」や「口承伝承」に至っては、民俗学が扱っているような古老によって伝えられた「固有の文化」の意味合いを強く持っている。

もちろん、調査者が聞き出したいのは、話者のナラティヴ・ライフ・ストーリーであり、口述の生活史である。しかし、調査者が「黒子」となり、対象者の「語り」の「産婆役」に徹しているように見られる場合でも、調査者のインタヴューアーとしての態度、関係性、発話行為、性格などすべての要素がライフヒストリーの生成にかかわっているのである。しかしだからと言って、私は何もインタヴューアーとしての「心構え」とか「精神的注意」を喚起しているわけではない。むしろ、私の言いたいのは「対話の論理」であり「対話の関係性」である。「対話」は原則として「互恵的関係性」ないし「互酬性」を基本としている。つまり調査者と被調査者との間にも、暗黙の「互酬性」が働いており、被調査者（対象者）の「語り」が延々と続き、調査者の方では、インタヴューにおいて時々相槌と多少の質問くらいしか投げかけないように思われる。表面上は「互恵的」と言うよりも「一方的」とも思われるが、しかし、インタヴューアー（調査者）とインタヴューイー（被調査者）の関係性は、見え

ないところで「互恵的」となっているように思われる。つまり、ライフヒストリーを語ることに於いて「聞き手」が眼前にいうことは、自らの人生の「意味付け」を共有してくれると考えられるからである。

この点は、自伝の執筆動機とは大きく異なっている。つまり、自らの人生の「欠如性」に気づいたときに「自伝」が書かれ始めるのと対照的に、ライフヒストリーを語るときには、「聞き手」がある種の「充填感」や「自己肯定感」を提供する役目が担われているように思われる。臨床心理学や精神分析でナラティブ・セラピーやライフ・ストーリーの手法が応用されるケースも、このような「自己充実感」や「自己解放感」にある種の効果があると考えられるからではないだろうか。<sup>(6)</sup>もちろん、すべての人が「癒し」を求めてライフストーリーを語るわけではない。淡々と自らの歩んできた道を振り返ることもあれば、「悔恨」や「反省」「自己否定感」さえも付き纏うことも珍しくはないだろう。しかし、ともかく眼前に聞き手としてのインタヴューがいて、「聴いてくれる」というのは、話し続けようという意志を持続させるものである。もちろん、それが活字や本という形になって現れることをおそらく「期待」している部分もあるであろう。

それでは次にライフヒストリーのインタヴューにおいて、調査者と被調査者との間の相互作用による「意味の生成」について考察してみたい。社会学的あるいは文化人類学的な生活史調査の本質は、「調査する者の眼」と「調査される者の眼」との「視線」の交錯と自覚から、新たな第三の「視角（パースペクティヴ）」を獲得していく独特の過程にあるように思われる。つまり、調査者の眼と被調査者の眼とは、もちろん同じものを見ているわけではない。むしろ、被調査者の「生の軌跡」を振り返ってライフヒストリーを聞く場合、ほとんどは対象者自らしか知らない事実を、調査者はインタヴューの現場において初めて知ることになるのである。そうであるならば、被調査者自身による「意味付け」がまず初めに存在している。しかし、ライフヒストリーの「意味付け」については、調査者が被調査者に対して初めから明らかにしているかどうかは別にして、調査者の側でもそれなり

の価値付与が行われているのが普通である。例えば、どのような対象者のライフヒストリーを聞こうとしているのか、つまり被調査者を固有の名前ではなく、「〓としての」ライフヒストリーの「語り手」と考えているのか、と言う点にも如実に現れている。松本通晴らの関西の社会学研究者を中心とした庶民生活史研究会による『同時代人の生活史』(一九八九年)というインタヴューに基づいた生活史調査の本がある。この中には、開拓農民、野鍛冶、鉱山労働者、海女、失対日雇労働者、地方政治家などの「職業」という社会的属性に注目して「〓としての」ライフヒストリーを尋ねているケースがある。また、「甕島出身者」(離島出身者)や「木賃住宅に住まう人々」など出身地や居住地などの属性から生活史が採取されているケースもある。<sup>(7)</sup> このように、被調査者は固有の名前を持った一人の人間であるが、調査者にとっては、「〓としての」生活史の一つの「事例」として意味付けられる場合も多い。

職業や出身地、居住地、ジェンダー、エスニシティなど社会的属性が顕在的なものであれば、これは調査者側と被調査者の側では、ライフヒストリーの「意味の生成」において齟齬が生じることもあまりないであろう。もちろん、重点の置き所、アイデンティティの中心性などにおいて調査者と被調査者の間で違いが存在することもある。しかし、インタヴューを通しての相互作用の中で、そのような齟齬も発見できることが多いものと考えられる。しかし、例えば同性愛やセクシュアリティに関するライフストーリーやエイズや遺伝病、難病、精神病などのライフストーリー、あるいはさまざまな「被差別体験」などのライフストーリーでは、ライフヒストリーを語ること自体がいわゆる「カミング・アウト」に相当するケースも多い。<sup>(8)</sup> このような場合には、調査者と被調査者との間での「意味の生成」は、まさに共同作業であり、共同責任において公表されることになるのである。カミング・アウトの意味の生成は、ライフヒストリーがナラティブ・セラピーの役割を持ち一種の「癒し」の機能を果たすこともあるが、逆に公表することによってさまざまな軋轢や緊張関係を生み、「傷ついた経験」に至っ

てしまうリスクも伴っている。その意味でも、調査者と被調査者との間での「意味の共有」は非常に重要であると言える。

## 5 モノグラフ法と記述から作品化へ

ライフヒストリーの記述に関する部分も、生活史調査と密接に関連していると思われる。フィリップ・ルジュンヌは自伝を執筆する際に、作者は「自伝契約」を結ぶというユニークな解釈を示しているが、「自伝契約」と同様に、ライフヒストリーの記述に関しても、それが黙示的であれ明示的であれ、一種の「契約」が結ばれている、とも解釈できる。ルジュンヌは、自伝の定義を「誰かが自分自身の生涯を散文で回顧的に語った物語で、その物語が個人の生活、とりわけ人格の歴史を主として強調する場合、われわれはこれを自伝と呼ぶ。」としている。また彼は、自伝と小説との違いを説明する中で、次のように述べている。

自伝と小説との違いは、したがってテキストの外部にある。この違いを証明するためには、作品の外部にある要素を知らなければならない。自伝の場合、作者と語り手と主人公は同一人物と考えられている。つまり作品のなかの「わたし」は作者のことなのだ。しかし、テキストの内部にはそれを証明するようなものは何もなく、自伝というのは読者の信頼にもとづくジャンル、いわば「信託的」なジャンルなのである。その結果、自伝作家は作品の冒頭部で一種の「自伝契約」を結ぼうとする。つまり、弁明、解説、前置き、意図の表明など、読者と直接的なコミュニケーションを確立するための儀式をすべて演じるのである。

このような解釈に習って、ライフヒストリーの記述に関する部分も調査者と被調査者との間には一種の「契約」が結ばれている、と解釈することもできる。と言うのは、前述したように生活史調査では、インタヴューに

よるライフヒストリーの「意味の生成過程」が見いだされる。しかし、調査過程を通じた意味の生成は、未だ「固定したテキスト」を獲得しているわけではない。もちろん、調査者と被調査者との間では、「意味の共有」がなされ、それらが録音テープやビデオ・カメラやあるいは調査者のフィールド・ノートなどに「記録」されている状態ではある。しかし、これらのライフストーリー、ライフヒストリーの諸資料などをどのように整理し、配列し、記述し、解説していくのかと言う「記述から作品化へ」の「意味の創出」過程では、第三の「読者」という相手を想定しなければならないのである。そこで、読者へ向けての「契約」が必要になってくる。この第二の場面では、第一のインタヴューの場面で言わば「主役」であった被調査者（対象者）に替わって、調査者（研究者＝書き手）が「主役」に躍り出てくる。どのような、記述の仕方を探るのが良いのか、インタヴューの再現は必要か、時間軸をどのように切り取るか、注や解説はどの程度必要か、対象者は単数が良いか、複数を併記するのか、ライフヒストリーの内容分析や解釈はどの程度必要か、などなど非常に多くの「作品化」へのハードルを越えて行かなければならない。<sup>(10)</sup>

社会調査や文化人類学などでモノグラフ、エスノグラフィ、生活誌（ライフ・グラフィ）などの用語法がさまざまに使用されているが、ここでライフヒストリーやライフストーリーの作品化との関連でこのような調査法との関連を示してみたい。「生活誌」という言葉は、英語に訳すことは難しいが、ここではとりあえず“life-graphy”（ライフ・グラフィ）という造語を使用してみたい。さらに生活誌の「研究の系譜」を辿ることは、尚のことと困難であるが、私としては柳田国男、宮本常一、今和次郎、奥井復太郎、有賀喜左衛門などの民俗学、生活学、都市研究、社会学など広範な領域にまたがる系譜がイメージされている。<sup>(11)</sup>「生活誌」という言葉は、私の理解では、通常は「伝記」と訳されている biography（「個人誌」と訳し変えてもよい）と民族学・文化人類学の領域でなじみ深い「民族誌」（ethnography）を強く意識しているものと思われる。つまり、個人の「生活」（life）は、

本来なかなか外部からは「見えにくい」ものである。ライフヒストリーの場合には、誕生から死に至るまでのその人の「生涯」「一生」という時間軸を大きな基準として整理され、他者に可視化され、理解（了解）可能な形で提供されているものを指している。Biography（伝記）の場合も基本的には同じであるが、「伝記」が残されるということは、多くの場合「有名人」であったり、一般的な他者から関心を持たれている人であることが前提となる。また、Ethnographyの場合には、研究の系譜からも未開民族や「異文化」を記述することから出発しており、記述している主体と記述されている被写体（対象者）とは、異なる文化に属していることが多かった。したがって、ここで使用する「生活誌」は、記述している主体と対象とは同一の文化内にあって、それゆえに対象記述に際して、主体の「経験」や「主観」が容易に入り込みながら、他者に理解可能な形で可視化される作品（モノグラフ）である、と便宜的に定義づけることができる。その際、生活史（ライフヒストリー）のように、個人の「一生」という時間軸を基本に置く必要はない。したがって、都市生活誌、農村生活誌、あるいは家族生活誌、労働生活誌、大学生生活誌などが派生的に可能となるわけである。

生活誌の記述と作品化が、調査者の側の主体的選択で決まっていくなにに対して、生活史（ライフヒストリー）の記述と作品化は、被調査者（対象者）の側の主体的表現を採り入れ、それらを生かす必要がある。つまり、自伝や日記や手紙、あるいは語りやインタビュー、あるいは小説や随筆、詩歌、作品、自画像や写真に至るまであらゆる題材が、対象者のライフストーリーを表現している。そして、生活史の記述と作品化は、たとえ対象者が亡くなっていたとしても、一応は、調査者―被調査者相互の共同作成であり、意味の共同化であり、そして共同のテキスト化でもある。もちろん、著作の形式をとった場合の「著作権」は、基本的には調査者（研究者）の側に存しているであろう。生活史調査の過程をインタビューや聞き取りの場面と作品化の場面に分けることができるのは、その意味でも「共同作業」とは言っても、前者では対象者側に意味生成の主軸が置かれ、後者の過程で

は研究者側に意味生成の主軸が移行してくる、という事を意味しているのである。つまり、作品化のバリエーションは、研究者の多様な記述の仕方や資料の読み込み方にも起因しており、対象者に応じた記述の多様化も考えにいれておかねばならないのである。

## 6 調査のバイアスとジレンマ

今まで、質的調査法の中で、生活史法のインタビューを中心として調査過程における意味の問題を論じてきたが、調査者と被調査者の間で共同の意味が生成するばかりではなくて、調査過程においてはバイアスやジレンマなどマイナスの要因の方も指摘しておかなければならない<sup>12)</sup>。調査のバイアスとして微妙な問題を投げかけているのは、多くは、調査者と被調査者との間にある「差別感」や「差別性」をめぐる問題である。ライフストーリーの被調査者(対象者)が、さまざまな意味で、マイノリティであり、被差別体験が「語り」の中心に位置している場合には、調査者が細心の注意を払って、その「被差別体験」を聞き出そうとしても、また、それ故にかもしれないが、調査のバイアスがかかわってくるのである。

例えば、同性愛者へのインタビューの場合に、インタビューアー(調査者)が「異性愛者」だった場合に、「同性愛」に対して、全く偏見や差別意識が払拭されているかどうか、その点は調査のバイアスとして依然として残っている。また、ある種の被害体験や被差別体験は、対象者にとつてのトラウマ<sup>13)</sup>心の傷になっていることもある。実際に「経験していない者にはわからない」という「思い」は、ライフストーリーの「語り」の中に、必ず忍び込んでくる被調査者の側のバイアスでもある。もともと、経験をともにしていない調査者―被調査者の間で、「語る―聴く」の関係を通して、どこまで理解が共有されるのであろうか。この問題は、異文化理解を前

提としている文化人類学や民族学では既に議論が尽くされている問題であるかもしれないが、生活史調査においても同様のジレンマを抱えていると言える。しかし、「経験」を共有しているからと言って必ずしも「語り手」―「聞き手」の役割が充分担えるというものでもない。むしろ、このケースでは多くの場合、「語り手」―「語り手」の関係になってしまつて、必ずしもライフヒストリーが聞けるとは限らない。逆に言うところ、「経験」を共有していないからこそ、一方が語り、もう一方が聴くという相補的な関係が保たれるのである。

また、調査のバイアスは一種の「過同調」の場合にも起こり得る。特に対象者の被差別体験や被害体験などが苛酷であり、ある種のPTSD（トラウマ後のストレス障害）などに悩んでいるような状態であったり、あるいは反差別などの運動に強い同調を示しているような場合、調査者の側でも「同調」「共振」の状態が、ある程度は必要不可欠であろう。精神科医とそこへ訪れる患者との関係において用いられる「転移」と「逆転移」の関係が連想されるが、ライフヒストリーを語ることがナラティブ・セラピーの役目を果たすことがあるように、生活史調査も比喩的に言えば、この「転移」関係を必要条件としている。しかし、医師やカウンセラー（臨床心理士）としての専門家ではない調査者（社会学あるいは文化人類学研究者）の立場では、「転移」を起こさせたり、「逆転移」の状態に陥ったりすることは、往々にして、ライフヒストリー調査が「過同調」を起こしたバイアスを伴つてしまうことが多いのである。例えば、エスニック・マイノリティへの支援、反政府活動への肩入れ、フェミニズム、マルクス主義、ナショナリズムなどイデオロギーへの同調、犯罪者や精神異常などの逸脱行動への過剰な「思い入れ」など、ライフヒストリーが他者とは異なる、特異なドキュメントであればあるほど、この種の「過剰同調」がバイアスを生む可能性も大きくなると言えよう。

そこで、このような生活史調査のバイアスやジレンマに対して、私はここで、調査論的な「心構え」ではなく、実際の提案をいくつかしてみたいと思う。つまり、生活史調査におけるより具体的な実践（プラクシス）の提

案である。その第一は、「対話」と「確認」の原則である。被調査者との「対話」は、何度も繰り返し行い、事実関係に対する執拗な「確認」を怠つてはいけない。われわれの「対話」は、一度行われた時と、また時間や場所を異にして行われた再度、あるいは何度かの「対話」では、事実だけではなく、受け取る「印象」さえも異なることがある。調査者は、その度に自己反省を繰り返しながら次の「対話」に臨むわけである。このような「対話」と「意味」の積み重ねこそが、調査上のバイアスを防ぐ一つの有効な手段となり得る。そして第二に、「相違」を前提としたコミュニケーションを基礎としなければならない。例えば、基本的な調査者と被調査者との間のジェンダーの相違を例にとつて考えてみたい。女性史が女性のインタヴューから始まり、女性の自伝や作家に対するフェミニズム的視角からの批評が存在しているのはよく理解できる。しかし、エスニック・マイノリティや移民研究から始まったライフストーリーの採取は、言語やエスニシティの同質性を最初の発端としてはいたが、次第に、個人の「相違」を基本的な視点として、異文化、他者としてのインタヴューへと広がりを見せている。ジェンダーやセクシュアリティの観点も、エイジ、ジェネレーションの観点も、現在では、「相違」を前提として「対話」を積み重ねて行くという段階に来ているのではないだろうか。

第三に、生活史調査の調査者相互間のコミュニケーションの重要性である。つまり、ライフストーリーのインタヴューそのものは単独で行うとしても、調査上、抱えている問題点などを常に他の研究者と連絡を取り合いながら、調査に伴うバイアスやジレンマを除去していこうとする自主的な研究会のような存在である。もちろん、さまざまなライフストーリーの資料の蓄積や公開などライフストーリー的な意味も含まれている。欧米では、オール・ヒストリー・ライフラリーなども充実にきて、さまざまな資料の蓄積がなされているようである。<sup>(13)</sup>しかし、現在の日本での生活史研究の現状では、歴史学(社会史)、社会学、心理学、文化人類学、民俗学など各分野でライフストーリーに対する関心は高まっているように思われるが、領域を越えた横断的な研究会組織は未だに少

ない状態である。また、歴史学・民俗学などを中心とした公文書館、図書館、博物館などにおいて口述資料（録音テープ）や自伝、伝記、自分史、ライフヒストリーなどの資料分類と保存が果たしてなされているのかどうか、依然として文字資料中心の分類・収蔵体制が中心的なものとなっているように考えられる。したがって、今後は生活史研究会などで、ライフヒストリーの資料としての重要性をさまざまな分野に呼びかけて行く必要があるものと思われる。

## 7 おわりに

今までに、生活史調査の意味論というテーマで社会調査の方法論と意味論、質的調査法としての生活史調査の過程、インタビューと回想法の意味について、また、調査者―被調査者の関係性と意味の生成、生活史の記述と作品化の意味、そして最後に調査のバイアスとジレンマについても検討してきた。生活史調査の意味論という課題は、私の中では、社会学理論や学説の中に位置付けた際のいわゆる〈意味学派〉と呼ばれる現象学的社会学やシンボリック相互作用論、エスノメソドロジーなどと「生活史研究」との関係性、そして社会学研究法や社会調査論に位置付けた際の「質的社会学」としての生活史研究の可能性、そして個人の記憶や時間意識の問題とも関連するライフヒストリーの「時間と記憶」論などと並列する一群の問題関心の上に立っているのである。<sup>(1)</sup> すなわち、生活史研究ではもちろん、対象者・個人の記憶や時間意識は基本的なベースになっているのであるが、調査者と被調査者の相互作用に応じた意味の生成も重要な特徴である。

またある意味では生活史調査の特徴は、調査者―被調査者の継続的な関係性にある。インタビューを通じた「意味の生成」は、その場だけでは終わらずに、多くの場合にはかなりの長期間に及ぶことも多い。つまり、対

象者とともに、調査者＝研究者自身も「年を経ていく」ことになるのである。ライフヒストリー調査のダイナミック（動態的）な性格はこの点にもかかわっているように思われる。例えば調査者が二〇代後半から三〇代の前半くらいの「若い研究者」で、生活史を語る対象者が七〇代、八〇代の老人であった時、そこにはさまざまな年齢の差、経験の差、価値観の差などが予想される。もちろん、「異文化」であるからこそ「話し聞く」という関係性が新鮮で、そこに思わぬ「共通の理解」が生まれることもあるであろう。しかし、調査者自身が年を取って五〇代、六〇代となっていた時に、若いときにインタヴューをした内容でその当時には理解できなかったことが、「実はこういうことだったのか」と理解できることもあるかもしれない。もちろん、時間が三〇年、四〇年と経ってしまえば、当の対象者自身は既に亡くなっていることだろう。しかし、ライフヒストリー調査における「意味の生成」は調査者の側において、実はその時点まで形成され続けていたのかもしれない。また、対象者が調査者と年代が近かった場合には、この「継続の関係性」は相互作用において三〇年、四〇年という長期にわたることも可能である。このような場合には、通常仮定している「社会調査」における調査者＝被調査者関係の時間の幅を大幅に越えた、質的にも異なった「関係性」と呼ぶべきであるのかもしれない。それは「友人」「親友」あるいは、D・プラスが「コンボイ」(同行者)<sup>(15)</sup>と呼んだ関係性になるのかもしれない。そして、生活史調査の場合の個人の相互作用の意味は、年齢、ジェンダー、エスニシティなど個人のアイデンティティの変容などに深く根差した意味の過程（プロセス）を紡ぎ出していく最良の方法の一つであると言えよう。

(1) デンツィンとリンカーンらは、質的調査研究の総合的なハンドブックを編纂し、それらをペーパーバック版としては①質的調査の風景―理論と問題点―、②質的研究の戦略、③質的資料の収集と解釈の三巻本に編集している。

Denzin, Norman K. & Lincoln, Yvonna S. (ed.), *The Landscape of Qualitative Research: Theories and*

Issues, SAGE Publications, 1998' Denzin, Norman K. & Lincoln, Yvonna S. (ed.), *Strategies of Qualitative Inquiry*, SAGE Publications, 1998, Denzin, Norman K. & Lincoln, Yvonna S. (ed.), *Collecting and Interpreting Qualitative Materials*, SAGE Publications, 1998, 参照。他に「社会調査における「事実とフィクション」の問題について」Banks, Anna & Banks, Stephen P. (ed.), *Fiction and Social Research: By Ice or Fire*, Altamira Press, A Division of Sage Publications, Inc. 1998, 等を参照。

(2) 佐藤健二「ライフヒストリー研究の位相」の中で、佐藤は「フィールドとしての個人」という表現を用いている。中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』所収、一三〇—一四一頁、弘文堂、一九九五年

(3) 佐藤健二「データの処理—データ・ベースの構築—」石川淳志・佐藤健二・山田一成編『見えないものを見る力【社会調査という認識】』所収、三〇九頁、八千代出版、一九九八年

(4) これらの第一段階、第二段階、第三段階の分け方自体も、相対的なものであり、例えば資料を読みながら数えたり分類したり、話を聞きながらメモを取ったり、インタビューの録音テープを起こして文字資料に書き換えたり、というように、調査行為そのものは絶えず「行き来」しており、ミクロな場面においては、第一段階の中に既に第二段階や第三段階が入り込み、また第二段階にも第三段階にも同様の事が起こっているのである。質的調査やフィールドワーク、エスノグラフィーの具体的な諸方法については、Rosman, G. B. & Rallis, S. F., *Learning in the Field: An Introduction to Qualitative Research*, SAGE Publications, 1998, Emerson, R. M., Fretz, R. I. & Shaw, L.

L., *Writing Ethnographic Fieldnotes*, The University of Chicago, 1995 (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋＝訳)『方法としてのフィールドノート』新曜社、一九九八年、John Van Maanen, *Tales from the Field: On Writing Ethnography*, The University of Chicago, 1988 (森川涉訳)『フィールドワークの物語—エスノグラフィーの文章作法—』現代書館、一九九九年

Schatzman, L. and Strauss, A. L., *Field Research: Strategies for a Natural Sociology*, Prentice-Hall, 1973 (川合隆男監訳)『フィールド・リサーチ—現地調査の方法と調査者の戦略—』慶應義塾大学出版会、一九九九年、箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門—』ミネルヴァ書房、一九九九年、などを参照。

(5) インタビューの過程において「対話」の意味をある意味で中断したり、再確認したりするケースとして、いわゆる「オフレコ」の注文がある。この部分は「レコード(録音)をオフにして下さい」という注文は、被調査者

が他者のプライバシーに抵触したり、自分自身の側の何らかの理由で、インタヴュー（調査者）にだけ伝えておきたいと思ったときに、この言葉が発せられることがある。ジャーナリズムなどの取材における「それは書かないで下さい」という注文と同様の条件である。この「オフレコ」のサイニングが、本当に沈黙しなければならない「秘密」ならば、例えばインタヴューに対してでも初めから決して語られることはない、という命題が正しいならば、「対話」において明かされた一つの「真実」として、他者に対しては配慮しながら、いずれは公になっていく種類のものと解することもできる。事実、インタヴュー（対象者）が有名人であったり、インタヴューにかなり慣れた人間の場合には、「オフレコ」の部分を意図的に相手に情報を与える一種の「情報操作」や「印象操作」として利用している場合さえないとは言えない。しかし、生活史調査の場合では、インタヴューとインタヴューとは、「対話」の中で不断の相互作用を行っており、概して「これはオフレコだよ」と言うセリフは、調査者と被調査者間の「親密性」を再確認する「約束事」のニュアンスを示しているということもできる。つまり、調査者がこの「約束」を守らないならば「これ以上は言えない」という暗黙の「リトマス試験紙」であるのかもしれないのである。

(6) 精神科医の江口重幸は、「ナラティヴ・セラピー」は、通常の治療面接で前提とされるクライアントと治療者の非対称的関係、つまり前者が語る内容を後者の知識が解釈するという図式を意識的に括弧に入れ、社会構成主義的、平等主義的な視点から、クライアントの経験に根ざした「声」を社会的な文脈へと引き出そうとするものである。それは従来の、既成の解釈枠をもってクライアントの語るストーリーを型にはめ込む傾向への有力な批判となっている。「江口、一九九、四八四頁」と言っている。江口重幸「病いの経験を聴くー医療人類学の系譜とナラティヴ・アプローチ」小森康永・野口裕二・野村直樹編著『ナラティヴ・セラピーの世界』所収、三三―五四頁、日本評論社、一九九九年。ナラティヴ・セラピーについては、他にMcNamee, S. and Gergen, K. J. (ed.) *Therapy as Social Construction*, Sage Publication Ltd, 1992 (野口裕二・野村直樹抄訳)『ナラティヴ・セラピー 社会構成主義の実践』金剛出版、一九九七年、White, M. and Epston, D. *Narrative Means to Therapeutic Ends*, New York: W. W. Norton & Company, 1990 (小森康永訳)『物語としての家族』金剛出版、一九九二年、野口裕二「アルコリズムの社会学ーアディクションと近代」『日本評論社』一九九六年などを参照。また、ナラティヴ（語り）を通してのアイデンティティの問題などについては、Antaki, Charles, & Widdicombe Sue, (ed.), *Identities in Talk*, SAGE Publications, 1998, Linde Charlotte, *Life Stories: The Creation of Coherence*, Oxford University

Press, 1993' など)を参照。

(7) 庶民生活史研究会編『同時代人の生活史』未来社、一九八九年。この研究会の名称と編纂された本の書名も象徴的できえある。松本通晴らは、明治、大正、昭和と言った同時代を生きてきた日本人「庶民」の生活史に興味があるのだという点を強調しているのである。

(8) ケン・ブラマーは、『セクシユアル・ストーリーを語る』の中で、「しかし、いまや個人的なセクシユアル・ストーリーを語る時代がまさにやってきたのである——すくなくともグループによつては。本書では、これは何なのか、つまり、ストーリーとはどのようなものか、なぜ人はそれを語るのか、それらはどこへ向かおうとしているのか、をじっくり考えてみたい。私は、人びとが自らのもつとも「親密な」生活のある局面を詳しく述べる、その個人的でセクシユアルな語りに注目したい。どのようにそれらが語られるようになるのか、現代生活でそれらが果たしている役割、そして世紀末にそれらがどこへ向かおうとしているのかを見てみたい。本書では、「ストーリーの社会学」の一般的分析からはじまって、「レイプの犠牲者」、「カミングアウト」したレスビアンやゲイ、「回復者」たちの「性的な被害を受けそれを切りぬけた体験者の話」の検討に移る。そしてさらに、そうしたストーリーの政治的な役割の分析とそれらが新しい私たちの親密性の市民権 (intimate citizenship) ——「親密な関係」が主な焦点となるかたち——を生み出す将来的な可能性にまで進みたい。全体をとおしての焦点は「世紀末に語られる個人的なセクシユアル・ストーリーの特定の事実にあるけれども、この研究の究極の目的はもっと広く、さらに一般的でフォーマルなストーリーの社会学を構築する一助となることにある。」(邦訳、一〇頁)と述べている。Ken Plummer, *Telling Sexual Stories: Power, Change, Social Worlds*, Routledge, 1995. (桜井厚・好井裕明・小林多寿子《訳》『セクシユアル・ストーリーの時代——語りのポリティクス——』新曜社、一九九八年)

(9) Philippe Lejeune, *L'Autobiographie en France*, Armand colin, 1971 (小倉孝誠訳)『フランスの自伝——自伝文学の主題と構造——』法政大学出版局、二二頁、一九九五年

(10) これらの諸点については、Rubin, Herbert J. & Rubin, Irene S., *Qualitative Interviewing: The Art of Hearing Data*, SAGE Publications, 1995, Coffey, Amanda & Atkinson, Paul, *Making Sense of Qualitative Data: Complementary Research Strategies*, SAGE Publications, 1996, Silverman, David, *Interpreting Qualitative Data: Methods for Analysing Talk, Text and Interaction*, SAGE Publications, 1993, Silverman, David,

- (ed.), *Qualitative Research: Theory, Method and Practice*, SAGE Publications, 1997, Atkinson, Robert, *The Life Story Interview*, (Qualitative Research Methods Series 44), SAGE Publications, 1998. なを参照。
- (11) 有末賢「生活誌研究と奥井復太郎」川合隆男・藤田弘夫編著『都市論と生活論の祖型―奥井復太郎研究―』所収、一三七―一五八頁、慶應義塾大学出版会、一九九九年、参照。
- (12) 調査方法論においてジェンダーなどの「調査のバイアス」の問題を扱ったものは数少ないが、大山七穂「ジェンダーと調査のバイアス」栗田宣義編『メソッド／社会学』所収、川島書店、一九九一―一六四頁、一九九六年が参考になる。また、フェミニストの観点から、公的知識と私的生活との間の「ミレンマ」について考察している Ribbens, Jane and Edwards, Rosalind, *Feminist Dilemmas in Qualitative Research: Public Knowledge and Private Lives*, SAGE Publications, 1998. も参照。
- (13) イギリスの場合には、エセックス大学の質的データ収集センター (QUALIDATA : ESRC Qualitative Data Archival Resource Centre) が質的データの資料のコレクションを公開しており、また大英図書館 (British Library) でもレコードなどの音の収集 (National Sound Archive) と公開が行われている。イギリスの場合の趣旨は、社会史に重点を置いた口述史で、労働者階級 (Working Class) や庶民の生活にかかわる資料に重点が置かれている。また、オーストラリアの場合には、オーストラリア国立図書館 (National Library of Australia) の中に、口述史コレクション (Oral History Collection) があり、ここでは、移民史、社会史、民俗学 (Folklore) などの資料として、写真やカセットテープの保存なども行っているようである。詳しくはインターネットの World Wide Web で <http://www.essex.ac.uk/qualidata> 及び <http://www.nla.gov.au/> によって利用できる。
- (14) 有末賢「質的社会学としての生活史研究」『法学研究』第六五巻第一号、二五九―二八五頁、一九九二年一月、有末賢「〈意味の社会学〉と生活史研究」『社会学年誌』(早稲田社会学会) No. 34、六一―七四頁、一九九三年三月、有末賢「ライフヒストリーにおける記憶と時間」『三田社会学』(三田社会学会) 創刊号、三七―八二頁、一九九六年七月、を参照。
- (15) Plath, David W., *Long Engagement: Maturity in Modern Japan*, Stanford University Press, 1980. (井上俊・杉野目康子訳)『日本人の生き方―現代における成熟のドラマ―』岩波書店、一九八五年。なお、コンボイ (convoy) を邦訳では「同行集団」と訳している。

参考文献

- Antaki, Charles, & Widdicombe Sue, (ed.) 1998 *Identities in Talk*, SAGE Publications
- Atkinson, Robert, 1998 The Life Story Interview, (Qualitative Research Methods Series 4), SAGE Publications,
- 有末賢 一九九二「質的社会学としての生活史研究」『法学研究』第六五巻第一号、二五九―二八五頁
- 一九九三「意味的社会学」と生活史研究」『社会学年誌』(早稲田社会学会) No 34、六一―七四頁
- 一九九六「ライフヒストリーにおける記憶と時間」『三田社会学』(三田社会学会) 創刊号、六七―八二頁
- 一九九九「生活誌研究と奥井復太郎」川合隆男・藤田弘夫編著『都市論と生活論の祖型―奥井復太郎研究―』所収、一三七―一五八頁、慶應義塾大学出版会
- Banks, Anna & Banks, Stephen P. (ed.), 1998 *Fiction and Social Research: By Ice or Fire*, Altamira Press, A Division of Sage Publications, Inc.
- Charlotte, Linde, 1993 *Life Stories: The Creation of Coherence*, Oxford University Press,
- Coffey, Amanda & Atkinson. Paul, 1996 *Making Sense of Qualitative Data: Complementary Research Strategies*, SAGE Publications
- Denzin, Norman K. & Lincoln, Yvonna S. (ed.) 1998 *The Landscape of Qualitative Research: Theories and Issues*, SAGE Publications
- 1998 *Strategies of Qualitative Inquiry*, SAGE Publications
- 1998 *Collecting and Interpreting Qualitative Materials*, SAGE Publications
- Emerson, R. M., Fretz, R. I. & Shaw, L. L. 1995 *Writing Ethnographic Fieldnotes*, The University of Chicago,
- (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳) 一九九八『方法としてのフィールドノート』新曜社
- 江口重幸 一九九九「病いの経験を聴く―医療人類学の系譜とナラティヴ・アプローチ―」小森康永・野口裕二・野村直樹編著『ナラティヴ・セラピーの世界』所収、三三―五四頁、日本評論社
- Lejeune, Philippe 1971 *L'Autobiographie en France*, Armand colin, (小倉孝誠訳) 一九九五『フランスの自伝―自伝文学の主題と構造―』法政大学出版局

- Maanen, John Van, 1988 *Tales from the Fields: On Writing Ethnography*, The University of Chicago (森川 涉訳) 一九九九 『フィールドワークの物語—エスノグラフィの文章作法—』 現代書館
- McNamee, S. and Gergen, K. J. (ed.), 1992 *Therapy as Social Construction*, Sage Publication Ltd. (野口裕二・野村直樹抄訳) 一九九七 『ナラティブ・セラピー—社会構成主義の実践—』 金剛出版
- 箕浦康子編著 一九九九 『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィ入門—』 ミネルヴァ書房
- 野口裕二 一九九六 『アルコホリズムの社会学—アディクションと近代—』 日本評論社
- 大山七穂 一九九六 『ジェンダーと調査のバイアス』 栗田宣義編 『メソッド／社会学』 所収、一四九—一六四頁、川島書店
- Plath, David W. 1980 *Long Engagement: Maturity in Modern Japan*, Stanford University Press (井上俊・杉野 目康子訳) 一九八五 『日本人の生き方—現代における成熟のドラマ—』 岩波書店
- Plummer Ken, 1995 *Telling Sexual Stories: Power, Change, Social Worlds*, Routledge., (桜井厚・好井裕明・小林多寿子《訳》) 一九九八 『セクシュアル・ストーリーの時代—語りのポリテクス—』 新曜社
- Ribbens, Jane and Edwards, Rosalind 1998 *Feminist Dilemmas in Qualitative Research: Public Knowledge and Private Lives*, SAGE Publications
- Rossmann, G. B. & Rallis, S. F. 1998 *Learning in the Field: An Introduction to Qualitative Research*, SAGE Publications
- Rubin, Herbert J. & Rubin, Irene S. 1995 *Qualitative Interviewing: The Art of Hearing Data*, SAGE Publications
- Schatzman, L. and Strauss, A. L. 1973 *Field Research: Strategies for a Natural Sociology*, Prentice-Hall (川合 隆男監訳) 一九九九 『フィールド・リサーチ—現地調査の方法と調査者の戦略—』 慶應義塾大学出版会
- Silverman, David, 1993 *Interpreting Qualitative Data: Methods for Analysing Talk, Text and Interaction*, SAGE Publications
- (ed.), 1997 *Qualitative Research: Theory, Method and Practice*, SAGE Publications,
- 庶民生活史研究会編 一九八九 『同時代人の生活史』 未来社

- 佐藤健二 一九九五「ライフヒストリー研究の位相」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』所収、一三―四  
一頁、弘文堂
- 一九九八「データの処理―データ・ベースの構築―」石川淳志・佐藤健二・山田一成編『見えないものを見る  
力【社会調査という認識】』所収、三〇九頁、八千代出版
- White, M. and Epstein, D. 1990 *Narrative Means to Therapeutic Ends*, New York: W. W. Norton & Company,  
(小森康永訳) 一九九二『物語としての家族』金剛出版